



Install 今号の特集 Vol. インストール容量

<input checked="" type="radio"/>	岩本社会学論集 Service Pack 1	3.0	X,XXX 語	

『河原通信』3号の特集“岩本社会学論集 Service Pack 1”は以下の3つの記事から構成されます。

- 【NEWS NO.1】岩本先生ご実家より当プロジェクトにブドウ送らる
(text by 高柳紫呉)
- 【NEWS NO.2】「瀬崎紀行」がアニメ雑誌の聖地巡礼特集に登場
(text by 高丘諒)
- 【SPECIAL REPORT】タイ国少女マンガ事情
(text by 高柳紫呉)

“岩本社会学論集 Service Pack 1”は『岩本社会学論集』を既に購入された読者の方にはすみやかなアップデートが推奨されます。

その他

- 岩本ナオ
- マンガ表現論
- 現代日本の地域社会
- 聖地巡礼・コンテンツツーツーリズム

等のトピックに関心のある方にもインストール可能です。

What is it? : 本紙はマンガ家・岩本ナオ評論サークル“岩本社会学プロジェクト”のペーパー（河原通信社発行）です。2012年発売の新刊『岩本社会学論集』のアフター情報+αの内容となっております。

Project Members : 楠爪太作 a.k.a. 高丘諒（河原通信社, @diskhszm）と日高利奈 a.k.a. 高柳紫呉（紫呉屋総本舗, @shigureya）の2名です。くわしくは <http://goo.gl/fqPuk> までアクセスしてください。

岩本社会学論集 Service Pack 1 : お楽しみください!

Trash

Read

岩本先生ご実家より当プロジェクトにブドウ送らる (text by 高柳紫呉)

実にストーリーが詰めて気持ちの悪い話ですが、われわれは岩本先生の実家の住所を把握しています。種明かしをすれば、これは単純に原画展のときのプレゼントが実家から直接送られてきたというだけのことで、当選した人はみんな知っている訳です。

『論集』送付から1週間ほどのち、右写真のように大変立派なブドウが送られてきました。何でも奥迫川特産のピオーネとのこと（4房、計2キロ）。上品な甘みのある非常に瑞々しいブドウで、普段あまりブドウを好まない私も美味しく頂きました。

実はこれには後日談があります。岩本先生のお父様から「メロンを送る」と電話があり、ブドウももらった旨説明すると、「そういえば母ちゃんが……」と家族内で微妙に情報が共有されていなかった模様。ともあれ『論集』は好評のようでなによりでした。ちなみに岩本先生ご自身の手にもわたっているようなので、近々反応があるかも知れません。



NEWS NO. 1

NEWS NO. 2



「瀧崎紀行」がアニメ雑誌の聖地巡礼特集に登場 (text by 高丘譲)

最新刊『岩本社会学論集』にも収録されている、岩本マンガ聖地巡礼記「瀧崎紀行」が、このたび学研『声優アニメディア』9月号別冊・聖地巡礼特集で取り上げられました。以前よりわれわれの仕事に関心を持って頂いたマンガエッセイストの川原和子さんによって、『雨無村役場産業課兼観光係』の副読本(?)として『瀧崎紀行』が紹介されています。「聖地巡礼」というと一時的流行りのようにも見えますが、入り口が何であれ一度その土地との関わりができると、思いもかけない世界が開けているものです。2010年に奥迫川に行った時は、それが2年後に商業誌に載るなんて思ってもみませんでした。

この勢いで全国の岩本ファンや観光関係者から注文が殺到したら、『論集』200部なんて(われわれ2人がお料理コンテストやラジオショーに出て営業する必要すらなく)一瞬ではけてしまうぞ!……と営業部では捕らぬ狸の皮算用に胸を躍らせています。

SPECIAL REPORT

タイ国少女マンガ事情

(text by 高柳紫興)

ほんとうは今回のペーパーでは別のネタをやる予定だったのですが、準備期間の1週間をタイで過ごすことになってしまったため物理的に完成不能になってしまいました。早めに着手しなかった自分が悪いんですけどね。というわけで、身から出たさび、瓢箪から駒の海外特派員レポートです。

タイにおける少女マンガ事情なんて云っても全くピンとこないと思いますが、日本の少女マンガは(当然のことながら少年マンガも)かなり翻訳出版されています。尤も、部数的には(われわれの感覚からすると)それほど大きくありません。こうした「贅沢品」を気軽に買える層というのは限られていますし、また流通網の問題からも限定がつかます。しかし、それらを差し引いても、雑誌が複数タイトルあり、それなりの年数存続しているりもするので、諸外国の中ではかなり普及度が高く、市場規模も大きいと云えるでしょう。

少し歴史をさかのぼって話を始めます。これは現地出版社の偉い人から聞いた話ですが、タイにおける日本マンガの海賊版は1960年代には既にあったそうです。そしてこの証言を傍証的に裏付ける記述を過去の『マーガレット』でたまたま発見しました。1963年の第9号には「バンコクの日本少女」と題した記事があり、『マーガレット』が毎週空輸(!)され発売日の翌日には本屋で売られているとのこと。正直、毎週飛行機で送られていたなんてにわかには信じがたい内容なのですが、少なくとも1963年には何らかの形で日本の出版物が入手できる状況にはあったようです。

海賊版時代のことはよくわかっていないことが多いのですが、興味深い仕組みとして「表紙職人」の存在を指摘できます。海賊版は違法なものですので、当然表紙絵の生原稿なんて持ってません。印刷された本の表紙から版を作ります。この時コピーによって画質が低下するのは勿論ですが、何より問題なのはタイトルロゴや掲載作品名等の文字情報です。日本語そのままでは読めないし、イラストの部分にかかる邪魔な文字を消さなくてははいけません。ちまちま修正するというやり方もある一方、新たに表紙イラストを描き起こすことも多かったようです。じつ

は同様の問題は表紙だけでなくマンガの中身にも当てはまります。ただモノクロのトレス原稿だけでなく実際に彩色が必要な分、表紙の方が職人的な技術が求められます(トレス原稿でも下手くそがやるとかなり酷いですが…)

今回の滞在中も元表紙職人のブーンさんに会いました。この人は1970年代の末から約20年間、少女マンガの海賊版表紙を多く手掛けていました。この人はかなり上手いです。よほどきちんと見比べないと本物との見分けがつかないレベルだったりします。今回カラーでお見せできないのが残念です [f.1]。



[f.1] ブーンさんが描いた『ヨコハマ物語』(大和和紀)海賊版の表紙[右]。裏表紙[左]は作者不明。

ブーンさんが活躍した時期、彼のほかに3人の表紙職人がいたにもかかわらず、少女マンガ絵がうまく描けるのがブーンさんだけだったので結果的に少女マンガ専門のような形になったそうです。ちなみにブーンさんは少女マンガだけでなく、池上遼一や原哲夫も描いています。とても同一人物の仕事とは思えません。

さてそんな海賊版日本マンガですが、もう無くなってしまったのでしょうか?大部分が正規の版權契約を結んで出ているのですが、実は今でも海賊版は出ています。海賊版少女マンガでは「おうさか」や「りょうかん」などナゾの日本語タイトルがつけられたりして面白いです。おおもねちよい工口系の少女マンガ・レディースコミックがこうしたラインで出版され、それなりの需要があるようです。タイでは多くの場合、日本マンガの翻訳版単行本を手に入れるには漫画を専門的に扱う店に行かなければなりません。そうした店でも正規版とならんで堂々と海賊版が売られています。

工口に対する規制が厳しい(チクビはNG。成人

男性向けのエロ本でもモザイクがかかります) のでアングラ化するというのもわかるのですが、一方で正規版で新條まゆ作品が多数出されていてよく売れているという話からすると、どうやらアングラ化する必然性はありません。これは店頭で確認した傾向からも少年向け・少女向け問わずちよいとエロ系はたくさん出てます。ただし、これらはすべて「修正」が入ります。コマ単位で削除されたり、不自然なトーンが追加されたり、オノマトペがかぶさったり、といった方法でマズイものが見えないように加工されるわけです。その上で年齢指定のレーティングがかかります。しかし、指定の基準等はマチマチで拘束力もありません。『君に届け』に「15+」なんて指定がされているのを見ると驚かされますが、性的表現の有無に関わらず恋愛が入るだけで年齢指定を高め設定する出版社もあります(規制の件について詳しく知りたい方は、『マンガ研究』vol.18収録のトジラカーン・マシマ「タイにおける『日本少女マンガ』イメージの歪み』をご参照ください)。

ここまで日本の少女マンガの翻訳出版の状況を見てきましたが、では現地の人々が描く少女マンガはないのか? という疑問が浮かびます。一応、あるにはあるのですが [f.2]、最近はやや低調な様子で



[f.2] タイ作家による少女マンガの単行本。一番左がボンゴチ版、右2冊はマレーシア版。実はマレーシア版の方が作りがキレイだったりする。

す。先にも述べたとおり翻訳版の少女マンガにしてもそれほど大きな市場ではありません。単行本の一般的なタイトルでは4000部から5000部、売れ線ですの2~3倍という話も聞きました。このあたりから推して知るべしといった感じですが、雑誌は当然赤字です。この雑誌は単行本を待つより早く出せるという利点のほかに、タイ人作家の発掘・育成という機能も果たしています。たとえばボンゴチ社(少女マンガを多く出す現地出版社)は2002年から『PEACH』(月2回刊)『Comic Club』(月刊、

2012年4月で廃刊) というふたつの雑誌を出していて、この中のマンガスクールから10人強の作家がデビューしたそうです。ところが近年、新しい描き手も減少傾向にあり、また既にデビューした作家の活動も縮小しています。会社側の説明では最近の若い子はネットやケータイばかりでマンガを読まないなどとどこかで聞いたような責任転嫁をしていますが、実際のとこどうなのでしょうね。

日本マンガの翻訳でなく現地作家のマンガに特化している出版社の社長さんが云っていたことで印象的だったのが、作家よりも編集者の育成が課題という現状把握です。タイのマンガ出版社の多くは日本マンガの翻訳に関してはそれなりの蓄積があるのですが、いくら日本のマンガを読んでも編集者のノウハウまでは移植できません。読み手の感覚的にこっちの方がいいとかの判断はできるでしょうが、実際に新人作家を指導するという段になると話は別で、もっといろいろ必要になってくるはず。もちろん編集者の役割という点以外にも、諸々の(自主)規制が多くて作家が自由にできるこの幅が狭められているとか、そもそも市場が小さく需給サイクルが安定しにくいとか、外的な要因も多いと思われる。タイのように雑誌という形式がある程度定着しているところでも、自前でマンガ家が安定的に供給されて市場が自己増殖的に拡大していくまでには至っていないということを考えると、戦後日本におけるマンガ文化の歴史というのはかなり特殊な事例だったのではないかと考えて改めて考えさせられます(ここで「特殊」というのは単に珍しい、数が少ないというだけで、価値的な意味はありません)。ある文化現象の社会の中での位置は様々な要因によって変化します。それが現在われわれにとってなじみのある形になる歴史的・社会的条件を考える手掛かりとして、タイの事例はなかなか興味深いのではないのでしょうか。今後の研究の進展が期待されます。

河原通信vol.3.0

若本社会学プロジェクト COMITIA101ペーパー

発行 _____ 2012年9月2日

連絡 _____ iwamoto.sociology@gmail.com

文章 _____ 高柳紫呉(日高利奈)
+高丘譲(橋爪太作)

図案 _____ 橋爪太作(河原通信社図案室)
+アマリ号(10Mega Pixel 電算機)